

# 波羅蜜の展開と大乘經典の成立

保 坂 玉 泉

佛陀一代（八相成道）の記錄に大約二様の系統がある。一は史傳的記錄で、『修行本起經』『太子瑞應本起經』『普曜經』『過去現在因果經』等の佛傳諸經を始め、阿含部、律部等の小乘諸經論之に屬し、釋尊の修行、成道、說法、涅槃等の事實跡を主とし、その思想を從として記錄したものである。

その二は思想的記錄で、『般若經』『法華經』『十地經』『華嚴經』等の大乘諸經論之に屬し、佛陀の修行、成道、說法の思想教義を主とし、その事跡を從として表現したものである。前者歴史的事實的記錄と雖も、その編集記述が遙に佛滅後代であるため、その記事は佳なり理想化されておるし、後者大乘諸經論はその本來の性格として前者小乘諸經論の史實に基きつゝも、頗る飛躍的に理想的に表現創作されたものであることは學者周知の通りである。

釋尊の史實及び根本思想の記錄文獻は佛滅後五百歳西曆紀元前後を頂點として、その基本的經論が一應完成したのであ

るが、外觀的に諸經論の質量ともに複雑多岐で歸一するところが容易に把握し難いが、然し是等雜多の經論には必ず一貫した純粹形式、根本内容がなければならぬ、解り易く言え、具體的に修行・成道・說法・涅槃を貫く根本思想を把握することである。今研究の結果を先づ擧げると小乘諸經論を一貫した思想は四聖諦說で實は四聖諦思想の展開するところに小乘諸經論が成立したという方が史實である。之と軌を一にして大乘諸經論を一貫したものは波羅蜜教で、實は波羅蜜の展開したところに大乘諸經論が成立したことを實證したのである。このような研究の結果は決して新しい研究でもなく素より珍とすべきでもない。既に諦・緣・度の法門によつて聲・緣・善の三乘が成立したとする學說は古來通途の教義であり見方によつては陳腐でもある。陳腐ではあるがその眞理は古錦の價値がある。この中、今吾人は小乘の四諦說の方には觸れず、専ら大乘經の波羅蜜思想の系統を探つて見た。蓋しこの問題は全體的系統的には未だ手を染められていなかつ

たから、敢て研究發表するわけである。

大乘佛教とは自他皆共に佛に成るの道を實踐する宗教であるから、當然大乘經典は成佛道—菩薩道を以て純粹形式とした記録である、成佛を目的理想としない大乘經はない筈である。

佛陀の根本義、從て佛道の意義は、自覺と覺他、自利と利他、般若波羅蜜と方便波羅蜜、根本智と後得智、無分別智と分別智、平等智と差別智、絕對智と相對智等々表現の仕方は種々あるが、結局佛道とは自覺道と覺他道の二途を内含具備するを要する。佛陀の人格の純粹内容は自覺々他の智である。佛陀一代を大別して修行、成道、説法の三段階とすると成道時に於て自覺智と覺他智とが成立する。過去長時修行の結果自覺智を獲得し、同時に自覺智が一轉して覺他智となり展轉して現在及未來へ永遠に教化を施益せられる。所謂上求菩提の向上道の頂點が自覺智の完成となり、自覺智が一轉して下化衆生の覺他智向下道の發祥となるのである。以下大乘諸經典に就て之を實證する。

成佛道の最初の文獻は本生部の經典で、南北兩傳あり、北傳には小乘本生經と大乘本生經とあるから、本生部そのものは兩傳兩乘の一方に限定することは出来ないが、北傳本生部

經が大乘諸經論に與えた影響は大きく亦大乘經の原流をなしたものである。後の大乘諸經に本生譚が多く採用せられてゐるのを見ても解かる。

本生經の根本性格は成佛道の因地たる菩薩道を主説したもので、即ち過去久遠長時修行の思想、種々變化身の思想、六波羅蜜(六度)の思想、善因善果惡因惡果の因果思想自利利他自覺覺他の思想、悉當成佛の思想等を必須的内容としたものが本生經である。但だ小乘本生經は小乘一佛思想に基き釋迦一佛釋迦一菩薩の本生物語(成佛因緣談)に限られているが、大乘本生經は普ねく三世十方諸佛諸菩薩即ち一切衆生の成佛道まで説いて頗る飛躍を見せている。斯く小乘本生經が大乘本生經へと發達したことは本生經が廣く他の大乘諸經を産出する直接或は間接の基因をなした。換言すれば本生經は大乘諸經の母胎的基本的役割を演じた。般若部の根本思想たる般若波羅蜜思想、『十地經』の菩薩修行の十地及十波羅蜜の思想『般若經』及『法華經』の本生成佛思想及授記作佛の思想、是等の思想を繼承した『華嚴經』『法華經』の思想内容等大乘代表的經典の重要な思想は直接或は間接に本生經から承けたものである。凡そ本生思想(菩薩道)波羅蜜行を含まなくては大乘經は成立し得なかつた。本生經は大乘諸經典に不可欠な先驅思想であつた。

般若經は菩薩道を説いた大乘佛教の基礎的經典であること

は周知の常識であるが、その菩薩道の實質は六度行であり、就中、般若經の特質は六度の中前五度を第六般若波羅蜜に包含止揚し、前五度を一般般若波羅蜜に統一し、般若主義を強調すると同時に、般若波羅蜜を一轉し、方便波羅蜜へ展開せしめたものである。故に結局、般若經の純粹内容は般若道と方便道との二道に集結されるとされている。之を般若經の代表的な『摩訶般若波羅蜜多經』（大品般若）に就て見るに全卷は右の二道にて組織されていることが解かる。

この事は既に、『大品般若』の釋論たる『大智度論』第一卷に次の如く指摘している。

問曰、先見阿闍佛品（大品卷二十累教品第六十六）中囑累、今復囑累有二何異、答曰菩薩道有二種、一者般若波羅蜜道、二者方便道、先囑累者爲說般若波羅蜜體、竟、今以下說令衆生得是般若方便、竟、囑累、以是故、見阿闍佛後說三漚和拘捨羅品（大品卷廿七囑累品第九十）、般若波羅蜜中雖有方便、方便中雖有般若波羅蜜、而隨多受名、般若與方便一體是一。

乃ち『大品般若經』前半六十六品は般若波羅蜜道を説き、従つてその第六十六累教品（大品卷二十）は般若道の付囑なりとし、次『大品』後半二十四品は方便道を説き、従つてその最後第九十囑累品は方便道の付囑なりとし、而して般若と方便と本體これ同一なりと斷定した。蓋し方便道は實相般若

より展開した說法化益であり、根本無分別智より流出した後得分別智である。

般若が方便に展開する様相については『大般若經』卷五百七十第六分現相品第八（第六會勝天王般若）に巧明に説いて時舍利子問最勝言菩薩修甚深般若波羅蜜多、方便善巧通達法性、爾時即應坐菩提座、證得無上正等菩提、轉妙法輪、度有情衆、何緣先現苦行六年、降伏天魔、後成正覺、最勝答曰大德當知、菩薩修甚深般若波羅蜜多、方便善巧通達法性、實無苦行爲伏外道、故示現之云云

とあり、佛陀の修行降魔成道轉輪度生の經過は般若道と方便道を内容としているとする。又

大德當知、如是菩薩方便善巧行深般若波羅蜜多、能降伏天魔、伏諸外道、大悲化度一切有情云云  
般若波羅蜜多を行ずるのが方便波羅蜜である。大智が直に大悲に展開し、般若が方便に向下するのが大乘菩薩道の端的である。

故に方便加行なき六度三解脱は頂に止り般若の本旨に違ふとして『大品』勸學品第八に

爾時慧明舍利弗問須菩提、云何爲菩薩墮頂、須菩提言、舍利弗、若菩薩摩訶薩不下以方便行六波羅蜜、入空無相無作三昧、不墮聲聞辟支佛地、亦不入菩薩位、是名菩薩

薩摩訶薩法生故墮頂。

とあり六波羅蜜(般若)を方便に進展せしめざる菩薩は禪的に言えば百尺竿頭に墮在して轉身の妙なき向上の死漢となるわけである。されば『小品』方便品第六十九に言う。

須菩提般若波羅蜜多爲大事故興、所謂示是道非道、須菩提、是般若波羅蜜爲度無量衆生故興、爲利益阿僧祇衆生故興

般若は方便化益を目的とすべく展開したという、這箇の菩薩道は遙に自利の聲聞支佛道に異るとする。右一大事出興の思想は後の『法華』方便品「唯以一大事因緣出現於世」の思想と照應している。

要するに『本生經』の六波羅蜜行が『般若經』に繼承せられ特に般若波羅蜜が高調し一轉して方便波羅蜜となり、茲に七度が成立し、後の十度へと進む準備をなしたものである。

『般若經』の方便波羅蜜の展開したものが『法華經』、特にその序説とも言われるべき「方便品」の思想である。換言すれば『法華經』は方便波羅蜜を繼承し擴充したものである。故に經典成立から言えば『般若經』の後を承けて『法華經』が出たことも首肯される。

茲に方便(upāya)とは向つて行く、近ずいて行くという

語原で、或る理想に向う方法、眞實相に近づく手段という意味で、佛菩薩が之を用ゆる限り、具に之を善巧方便亦は妙方便という、而してその方便の内容は說法化益である。乃ち『般若經』の場合、實相般若根本智一轉して方便般若後得智となり妙善巧なる說法化益を展開して對機の衆生を教導して還つて本の實相般若に歸り根本智を證得せしむるものである。之を『法華經』に就て見るに「方便品」初頭に

吾從成佛已來種々因緣種々譬喻廣演言教無數方便引導衆生令離諸着

とあり、斯文は『法華經』全卷の目的を明かにしたものである。佛陀樹下成道は實相般若を觀照されたものであるが、實相般若即ち諸法實相は唯佛與佛難解難入の故に成佛以來種々言辭方便(三周說法)を以て分別解説された。『法華』の十如是の諸法實相は『般若經』の實相般若に外ならぬ。又「方便品」に

云何諸佛世尊唯以一大事因緣故出現於世、諸佛世尊欲令衆生開佛知見……欲示衆生佛之知見……悟佛知見……入佛知見云

あるは何人も知る所の金文であるが、方便說法の目的は衆生をして還つて佛之知見に開示悟入せしむるため、換言すれば一切衆生皆共成佛道にありとする。

說法智は佛の根本・眞實・自覺智が展開して後得・方便・

覺他智となり、未悟の衆生當成の佛をして悟入成佛せしむるにあり。畢竟『般若經』の方便波羅蜜の説法の記録が『法華經』の成立となつた。即ち之を波羅蜜思想の展開から見れば『大品般若經』後半の七度説が『法華經』の七度説となり専ら方便度を中心とし重點としたもので、「妙莊嚴王本事品」に「久修菩薩所行之道所謂檀波羅蜜、尸羅……羶提……毘梨耶……禪……般若波羅蜜、方便波羅蜜云々」とあり、波羅蜜展開の次第を明かにしている。

般若（大智）より方便（大悲説法）へ、『般若經』から『法華經』への展開の事情に就ては「方便品」に「觀樹經行三七日の思惟」「梵天勸請」「初轉法輪に於ける五比丘の爲めの方便説法」等々諸經典通途の史談が擧げられ、佛陀成道思想より説法思想への推移の過程が裏書きされている形である。

尙『般若經』と『法華經』には重要な説相に於て頗る一致或は酷似するものがある。先づ、『大品般若經』の前半には三周説法が記されてある。即ち第一序品より第四往生品に至る四品は第一周の説法であつて、佛、上根人舍利弗の爲に自宗を示すもの、第六舌相品より第二十六無生品に至る二十一品は、佛、中根人の爲に須菩提をして轉教せしめ、第二十七問住品より第三十三歎品に至る四品は、佛、下根人天主等の爲に般若の體を出だしている。これ『法華經』「方便品」「譬喻

品」「信解品」乃至「化城喻品」等に渉る上中下三根對三周説法の化儀に相似している。

『大品般若』恒伽提婆品第五十九には恒伽提婆、譯して河天と名くる女人の成佛の因縁が説かれてあるのは、『法華經』提婆達多品の八歳龍女の成佛の因縁に酷似している。前者は金華を佛の頂上に散じて供養莊嚴し、後者は寶珠を佛に獻じて莊嚴し、共に女身を轉じて男子に變成して菩薩道を行じ、佛の授記を得て當來成佛するというのである。兩者の因縁談甚だ類似するものがあつて、本來同一因縁が二經に別に記録されたものではなからうか。それは二經共に方便道を説き、方便道の根本義たる一切衆生成佛之道即ち授記作佛を力説するからである。乃ち『般若經』の方便道の展開に伴つて授記思想は法華經に至つて盛況を呈したものである。

本生思想の代表的なものは、『六度集經』中の最大長篇「須拏那經」その單譯經『普施太子本生經』で、經名の如く普施太子の本生譚を説いている。次に授記思想の主なるものは『法華經』『提婆達多品』の提婆達多成佛の因縁談である。此二つの因縁談の筋は甚だ相似たものがあつて、共に提婆達多の宿縁を出だしているが、前者にあつては阿私陀仙は普施太子（釋迦の前身）を教導したもので、今の大迦葉の前身なり

とし、他に老貧の梵志あり太子の二愛兒を酷使した上、之を他國に轉賣した、これ今の提婆の前生なりとし、後者『法華』「提婆品」にあつては、阿私陀仙が提婆の前生であつて、過去國王(釋迦の前身)を教導した善知識なりとし、この善根功德の報によりて彼提婆は未來成佛して天王如來となり、その佛世界を天道と名づけんと授記された。『本生經』で惡人とせられた提婆は、『法華經』に至つて善知識とせられ尙お成佛の記さえ授けられている。『本生經』の本生成佛思想と『法華經』の授記作佛思想との一貫性あることを確認すると共に五逆惡人の成佛思想へ飛躍している。

但し本生成佛思想と授記作佛思想には形式上自ら差異がある。前者は釋迦菩薩の過去の向上的修行談で、已に般若の自覺智を證悟された已成佛談であるのに對し、後者は釋迦佛が向下的に方便説法の覺他智を開顯して佛弟子提婆等が當來成佛することを豫言記別したもので、佛陀の成佛過程を佛弟子に見出したわけである。兎も角、この兩因縁談には釋迦一佛の成佛より佛弟子等の成佛へ、自覺より覺他へ根本智より後得智へ、般若波羅蜜より方便波羅蜜へ、『般若經』より『法華經』へと、成佛思想の飛躍があつたのである。

更に委しく系統的に言えば、『本生經』の本生成佛思想より『法華經』の授記作佛思想への媒介をなしたものが『般若經』特に『大品般若』である。即ち『般若經』は本生思想を受け

て更に『法華經』を引き起したわけである。故に成佛思想に限つて『法華經』は遙かに本生思想を承け、近く『般若』を受けているから本生・授記兩思想を併せ持つてゐる。乃ち「化城喩品」の大通智勝佛の因縁は釋迦佛の本生譚で、下根の佛弟子の成佛授記の洪範として示されたもので、本生成佛と授記作佛とは本質的に同じいもの、師弟同一乘道なることが愈々明かである。

大乘『大般涅槃經』の世に出たのは『法華經』の後であることは、南本卷九・「菩薩品」第十六に

是經出世如<sub>下</sub>彼菓實多<sub>中</sub>所<sub>中</sub>利<sub>中</sub>益安<sub>中</sub>樂一切、能令<sub>中</sub>衆生見<sub>中</sub>如來性、如<sub>下</sub>法花中八千聲聞得<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>記別<sub>一</sub>成<sub>中</sub>大果實<sub>上</sub>、如<sub>下</sub>秋收冬藏更無<sub>レ</sub>所作<sub>一</sub>、一闡提輩亦復如<sub>レ</sub>是於<sub>レ</sub>諸善法<sub>一</sub>更無<sub>レ</sub>所作<sub>一</sub>

とあるに因つて知られる。されば天台大師は『法華』圓教の追説追泯が大乘『涅槃經』の説法なりとしている。果然、『涅槃經』各品の説相及内容に『法華』の譬喩因縁等を襲用したと思はるゝ箇處が頗る多く、『法華』の追説たること明かである。『法華』の追説といふことは時間的に『涅槃經』は『法華經』の後に成立したことを確證するものであるが、更にこの追説の内容は單に『法華』の短を補うのみであるか、若しくは本經が『法華』以上に独自の使命を有せざるかどうか。

天台智者大師は『法華玄義』卷十下に「涅槃臨滅更扶三藏二約將來一使下末代鈍根不於佛法一起斷滅見」というて本經の末代贖命の教なることを明かにしている。本經の中にも勿論當座贖命の說法はあるが、その主目的は末世の一切衆生濟度にありとする。之を本經に就て見るに「一切大衆所問品」第十七に

今者如來欲爲未來無量衆生作大明故、說是大乘大涅槃經、

とあり。「菩薩品」第十六には授記に速記と遠記とありとし、實例を擧げてその利害を説明し、

以是義故、隨發速願故與速記、護正法者爲授遠記

と結ぶ。護正法者とは「當に久々に正法を護持して然して後乃至無上佛道を成すべき」輩を指し、それに與うる記別を遠記という。この遠記こそ未來成佛の授記で本經の主目的である。これ等の文獻はいずれも本經が末代贖命の教、未來凡夫成佛の道なることを證して充分である。

然らば凡夫未來成佛の根據如何、「師子吼者一切衆生悉有佛性一如來常住無有變易」(第廿五卷師子吼品第二十三の一)というに在り。同様の文獻を擧ぐれば「義者卽是如來常住不變、智者知一切衆生悉有佛性」(卷六四依品第八)。

「知如來身金剛無壞……亦復能知一切衆生悉有佛性」(卷十五梵行品の二)等々である。「一切衆生悉有佛性」の句と「如來常住無有變易」の句とは本經には多くは別々に説かれてゐる。二句一連の文は前記の如くで實は本經中には少ない。如來常住無有變易の句は、佛性は常住なりというに同じいから即ち直に一切衆生に悉有ということになる、故に二句の一方何れでも意義充分である。而して前掲師子吼品の文に師子吼(說法)とは一切衆生悉有佛性云々とあるが如く本經說法の主意目的は正に佛性常住の信仰を持たせるに在る。一切衆生の範圍に就ては『大涅槃經』の初分には闡提人を除くのであつたが後には「我常宣說一切衆生悉有佛性乃至一闡提等亦有佛性」(卷二十五師子吼品第二十三の一)とある如く一切衆生の中には一闡提をも除外しないようになった。蓋し佛性觀の飛躍であつて、行佛性觀より理佛性觀への發達と見るべきか。何れにしても本經は佛性を根據とする未來一切凡夫成佛を説く末代贖命の教である。

斯くして『大涅槃經』一篇は全篇方便波羅蜜(說法化益)を以て始終してゐること『法華經』と異らず、形式に於ては『法華』の追説延長なりと見ることが出来る。慧遠の『涅槃經義記』卷一には本經の組織構造を科するに五分説を以てしているが、要は本經序文は化益(說法)方便を主意とするこ

とを明かにし、中間正宗分は凡夫化益、聲聞化益及び菩薩化益の三種に攝約し、凡夫化益を更に闡提化益と天魔外道化益とに細別している。何れにしても一切衆生悉有佛性の理を信ぜしめ未來成佛の記を得せしめたことは前述の如くである。

而して此涅槃の佛如來は迦耶始成の佛陀にはあらずして久遠實成の佛なることも全篇に散見しているが、特に卷二十三「高貴德王菩薩品」の五に於ける今番出世の釋迦如來が「方便現涅槃」「而實不入涅槃」の法説と長者子の譬喩と、『法華壽量品』の「方便現涅槃而實不滅度」の文と良醫狂子の譬喩とは全く同巧異曲の感なき能わず、『法華』の本門と『涅槃經』とは未來衆生方便化益の點に於て相通するものがある。

卷二「純陀品」第二にも

爾時純陀白佛言、如是如是誠如尊教、雖知如來方便示現入於涅槃、而我不能懷憂惱、覆自思惟、復生慶悅、佛讚純陀善哉善哉能知如來示同衆生方便涅槃とあり、卷四「四相品」第七の上には佛は今悉多太子として始めて出家せるにあらず「我已於無量劫中出家學道」と云われ、又今始めて道場の菩提樹下に於て降魔成道せるにあらず「我已於無量劫中成阿羅漢果」と謂われ、次で

一切衆生成謂是人、然我實非、善男子、我雖在此閻浮提中、數々示現入於涅槃、然我實不畢竟涅槃、而諸衆生皆

謂如來眞實滅盡、而如來性實不永滅、是故當知是常住法不變易法云

永劫不滅の如來とは佛性のことで、現身佛は佛性の如より來つて佛性の如に去る。畢竟久遠實成無量壽如來の示現往來方便説法は一切衆生をして佛性を信行せしむるにあり。

要は久遠の成道正覺（般若波羅蜜）から示現化益（方便波羅蜜）へ展開したところに『大涅槃經』の成立となつたことは『法華』特に「壽量品」とその軌を一にするものである。

上來は般若波羅蜜が方便波羅蜜に展開したところに『法華』『涅槃』の成立となつた経過を探つたが、爾下は般若波羅蜜が十波羅蜜に展開して『十地經』及『華嚴經』の成立となつた経過を究めるのである。前者は釋迦一佛の成佛過程の記録であり、後者は廣く諸菩薩の成佛過程の記録である。一般諸菩薩の成佛道は勿論範を釋迦菩薩に採り、佛道も菩薩道も畢竟同一乘道であるから、成佛過程は兩者本質的には異いは無い。只成佛過程を因地から説くか果位から説くか、その表現記録の仕方によつて經典に相違を來たした。前の『法華』『涅槃』は佛陀の立場から成佛道を表現し、次の『十地』『華嚴』は菩薩の方面から成佛道を記録した。而してこの兩系の成佛道がいずれも『般若經』から發祥展開していることを明かにし得たのである。

十地説の起原に就て古來天台などで『大品般若』卷六發趣品第二十の十地説を指摘しているのは周知の通りであるが、『大品』の十地説が如何にして『十地經』の十地説に進展したか、先ず二經の十地名を擧げてみると、『發趣品』は(一)乾慧地、(二)性地、(三)八人地、(四)見地、(五)薄地、(六)離欲地、(七)已作地、(八)辟支佛地、(九)菩薩地、(十)佛地となつてゐる。『十地經』の方は、(一)歡喜地、(二)離欲地、(三)發光地、(四)焰慧地、(五)難勝地、(六)現前地、(七)遠行地、(八)不動地、(九)善慧地、(十)法雲地となつてゐる。

先ず兩經を比較して見ると分量的には大小遙かに異なるが、その構造組織に至つては甚だ相似するものがある。いずれも第一地から順次に菩薩修行の道程を示し菩薩治地業を數十箇條を擧げ當地の性格を明かにしてゐる。但だ異なる所は前記の如く十地の名稱と治地業の箇條の數量との點に在る。故に形式的には一見『發趣品』が脫化獨立して『十地經』になつたのではないかとすら思はしめるものがある。

『發趣品』の十地名は三乘共十地であつて第七已作地までが聲聞地、第八地以上に辟支佛・菩薩・佛の三地を加上したもので、獨菩薩地ではない。然るに『發趣品』では最初から『菩薩摩訶薩從二一地至二一地……菩薩摩訶薩住二初地一時

行二十地」などいうて、各地に唯だ菩薩の治地業のみを擧げて、毫も聲聞緣覺二乘行などには觸れず、明に獨菩薩地を出だし、始に地名は唯だ一地二地乃至十地と數字で序列して各地の性格及治地業を敘了つたところに乾慧地性地等の三乘共十地の具體名を列記してゐて恰も竹頭接木の感がある。これは實質的には菩薩道は獨立したものの、未だ適當な地名を附するに至らず、取敢えず從來あつた二乘の賢聖位を襲用して菩薩位を加上し三乘共十地としたものの如く、菩薩地としては名實相應しない状態にある。それだけ『大品般若』は十地思想の發祥處であるということが確かめられる。

十地菩薩道が『般若』から脫化して獨立の經典を形成するには同時に當然獨菩薩地名を考える必要に迫られ、菩薩地實體に相應した名稱が與えられた。而してこの附名に二種あつたようである。一は『菩薩本業經』十地品の(一)發意地、(二)治地、(三)應行地、(四)生貴地、(五)修成地、(六)行登地、(七)不退地、(八)童真地、(九)了生地、(十)補處地の十地名で、二は『十地經』の前記歡喜等の十地名である。而して此兩地名を比較すると前者は釋迦佛の本生釋迦菩薩の修行の過程に應ずる名稱の如く、後者は一般に廣く諸菩薩道に従う名稱の如き相違が見られるが、何れも菩薩道である限り『本生經』の如く生生世世長時永劫波羅蜜を行じ、斷惑證理し行き竟に成佛するのであるから、この過程を一面

『本業經』の如く本生業的に、一面『十地經』の如く斷惑證理的に表現附名したことは自然であろう。（尙兩者は後の『華嚴經』に至つて五十二位に編入され地上の十地と地前の十位とに位した）。とまれ十地附名以前早く『大品般若』に十地思想が成立していて、それが脱化獨立して『十地經』となつた。般若經はやはり『十地經』の母胎であつたのである。

さて此場合波羅蜜、具體的には六度行は十地と如何なる關係にあつたか、一體「地」或は「菩薩地」というものは菩薩行即ち六度の行わるゝ場所、同時に六度行の進みゆく道である。從來既に六度行の思想が發達を極めたが、未だその行地の觀念が明かになつていない。般若經では既に前述の如く六度が般若波羅蜜で強調され更に方便波羅蜜に展開して、菩薩行は一應完成したので自然新に菩薩地を考出した、これが『大品』『發趣品』の十地である。

十地各地の治地業の中心をなすものは勿論六度行である、故に「發趣品」初頭に

若菩薩摩訶薩行<sub>二</sub>六波羅蜜<sub>一</sub>時、從<sub>二</sub>一地<sub>一</sub>至<sub>二</sub>一地<sub>一</sub>是名<sub>二</sub>菩薩摩訶薩大乘發趣<sub>一</sub>

というて地々に六度を行はずとし、又

菩薩摩訶薩住<sub>二</sub>六地中<sub>一</sub>當<sub>レ</sub>具<sub>二</sub>足六法<sub>一</sub>何等六、所謂六波羅蜜

とあり、これは第六地の中の治地業の六法としてゐる。前文と合考するに未だ各六度を各六地に配屬することなく各地に全六度を行じ行くのであつた、後、十度を説くようになっても始めは十地に配當することなく、『十地經』に至つて完全に十度十地が配分せられるようになった。然しかゝる配分は固定的のものではなく重點的なものとして、『十地經』卷二初地には

於<sub>二</sub>此十種波羅蜜多<sub>一</sub>、施到彼岸而得<sub>二</sub>増上<sub>一</sub>、餘到彼岸隨<sub>レ</sub>力隨<sub>レ</sub>分、非<sub>レ</sub>不<sub>二</sub>修行<sub>一</sub>

という。他の九地九度の説明についても同様の文言が繰り返されている。抑も菩薩行は『本生經』以來六度、『般若經』に至つて七度、『十地經』に進んで十度と展開したけれども、實質的には六度であつて、六度を以て地々の治地業萬行を統一するものであるから、各地に六度乃至十度を行じ、實は波羅蜜の進みゆく高さ深さの程度に隨つて十地の階級を考うるようになつたと思われる。果して「發趣品」や『十地經』を見ると一地に六度或は十度を全出し又各地の治地業に何れも六度乃至十度を含んでゐるのである。

一體『般若』の六度七度の説が十度に展開し波羅蜜が十數を帶するようになった理由は那邊にあつたか確たる文獻が無いので明かではないか、恐らく獨菩薩の十地の獨立と運命を

共にしたものではなかつたか、十地各地に從來の六度を配分整理するに當り四度の不足を來たしたので之を補う必要から方便・願・力・智の四波羅蜜が六度に加上せられて十度を得たのではないか。

然し方便等の四波羅蜜の加上は唯だ數量だけ合わせる爲の機械的なものではなく、例の『小品般若』の方便波羅蜜を延長し擴充したものであつた。『發趣品』の終の處に

菩薩摩訶薩住<sub>二</sub>此十地中<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>方便力<sub>一</sub>故、行<sub>二</sub>六波羅蜜<sub>一</sub>行<sub>二</sub>四念乃至十八不共法<sub>一</sub>云云

とあり、恰かも十地が形成されたので從來の六度七度が四念處乃至十八不共法を資糧として當に十度を構成せんとして未だ能はざる状態にあることを思わしめる。『小品』新出の方便波羅蜜は說法化益方便であるから、恐らく菩薩方便道の四無量は十力十八不共佛法三十七道品等を參看取材して願・力・智三度を加え合計十度を得たものであろう。斯くして十地に相應すべく十度が成立し次第の如く配當せられ菩薩地が完成した。結局十地も十度も共に『般若』を母胎として發芽し『十地經』に於いて生育し、爾後『華嚴』を首め他の大乘諸經に繁茂し十地十度が大乗不可缺の重要素となつた。

茲に一言附記することは十地十度等の十數の用法に就てである。古來華嚴教義の一特色として法相構成に十數を帶する常習がある、例えば十理、十佛、十玄門、十法界等々華嚴經

論隨處に見られ十數を帶せざれば止まない、而して十は滿數で事物を圓滿完全に表現し亦十數互具によりて重々無盡の法界を表現するとしている。この教風學風は『華嚴經』以前の『十地經』に既に盛に見出たされる。唯だ十地十度の法相のみならず、各種の治地業を十法入、十法等々實に夥しく擧げられてゐる、同時に無盡緣起の法相も處々に見出だされる。次に論ずる『華嚴經』に『十地經』が合流すべく充分準備が出来ていたのであつた。

『華嚴經』「十地品」というものは本經の大半を領有するものであることは何人も知るところ、「十地品」なくしては『華嚴經』は成立しない程重要なものである。即ち之を晉譯『六十華嚴』に就て見るに、七處八會の中、第一寂滅道場會二品の盧舍那品第二の一品は所信の因果たる始成正覺の釋迦是れ盧舍那佛にして萬德圓滿の相を具したもうことを説き、第二普光明殿會以下には廣く能信の行を説く、所謂十信、十住、十行、十廻向、十地、等覺、妙覺の五十二位を次第に列し各位に各々菩薩治地業を委説している。第八逝多林會（入法界品第三十四）は本會と末會とに區分され、前者は如來會と稱し、頓入法界分にして果法界を説き、後者は菩薩會と稱し、漸入法界分にして因法界分が説かれてゐる。而して後者菩薩會は主として善財會で行者善財童子が五十三善知識を南

詢するところに信位、十住乃至十地の四十一位を經歷し竟に法界實相に悟入することを説いている。

『華嚴經』の原始的な形は「入法界品」といわれ『六十華嚴』『八十華嚴』の「大華嚴經」は「十地品」等の五十二位を「入法界品」に結合して成立したと見る。(龍山章信氏梵文和譯十地經解説參看)。而して五十二位の中十廻向以下四十位は地前菩薩行位であつて、『十地經』では十地が獨立した許りで地前の住地まで未だ構造するに至らなかつたが、「大華嚴」を構成するに際し十地が採用せられ、同時に菩薩道も聲聞の七方便位に習つてか地前の行位を設定するようになった。即ち地前四十位(或は三十位)は十地の下部延長で、例の十帶

數法に習つて十進法に従つて設定されたことは容易に推察される。前述の『本業經』の十地説が茲に十住位として編入され、地前四十一位の最上部に十地を、最初基底に十住位を置き中間に十廻向十行を設け四十一位或は五十二位を組織した、恰かも屋根と礎石とを十地經系に取つて華嚴家を構造した如くである。従つてその各位地の治地業も十地の六度十波羅蜜を主要内容としてゐることが明かる。前にも述べたように菩薩道の本質は六度十度であるから、地五十餘位に涉り、切時三祇に互るも、菩薩は唯だ波羅蜜を行ずるからである。畢竟『華嚴經』も六度十波羅蜜の展開によつて組成されたことに歸着する。